

サイフの紐

ハンターズギルドには、様々な依頼が寄せられる。

今でこそ、ラグオル到達と、その時同時に起こったセントラルドームの爆破により、総督府より発令されたラグオル探索をメインの依頼としている。だが、そもそもハンターズギルドに寄せられる依頼はそれだけではない。

ハンターズギルドは、傭兵だった者達が集い形成された組織で、今は総督府の管轄にある。その経緯から、戦闘を伴う危険な任務を依頼されるケースも多いのだが、そうそう大規模な闘争があるはずもない。まして移民する為に向向したパイオニア2の中において、傭兵的な役割を任されるケースなどあるはずもない。

戦闘経験を生かす仕事としてのラグオル探索の他に、要人の護衛などもあるが、それもまた大多数のハンター達全てが請け負う程依頼数があるはずもない。

では、どういった依頼があるのか？

そもそも傭兵という仕事には、「争いごとを沈める」という要素もある。パイオニア2内の依頼となれば、この要素を満たす依頼が多くなるのは必然ではないだろうか？

「……だからって、こういう依頼は……なあ、ジッド……」

いつもの事だが、依頼内容にアッシュが愚痴をこぼしていた。

「他に適当な依頼がある訳でもないし、かといってお前を遊ばせておくのみな。まあこういうケースもハンターとしてあるということだ」

アッシュの保護者でありハンターとしてのマネージャー兼コーチである叔父ジッド。彼はこ

の手の依頼をアツシュが嫌う事をよく知っていたが、あえて彼に請け負うよう持ち込んできていた。

「でもさ、いくらなんでもこういうのは……」

「つべこべ言わずに行つてこい。ギルドに依頼され、ギルドがそれを受理した以上、これは立派な依頼なんだから」

最後の最後まで愚痴るアツシュを、ジッドは有無を言わず送り出した。

「……まあたまには生傷だけでなく、こういう痛い目も味わっておかないとな」

若いうちの苦労は買ってでもしろという。アツシュの場合、その苦労で報酬まで貰えるのだから、こんなに美味しい話はないだろう。

そんな皮肉を思いつきながら、彼がこれから体験するであろう苦労を予感し、ジッドは苦笑いを浮かべた。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

ハンターズは主に、あえて乱暴な言い方をするなら「力でねじ伏せる」方法で依頼を解決する。傭兵のような戦闘依頼でなくとも、例えば探索や救出といったものも大半に戦闘が絡み、その戦闘を乗り越えてこそ解決出来るケースが多い。

アツシュは主に、こういった「力任せ」な解決方法が得意だ。

いや訂正しよう。

アツシュは主に、こういった「力任せ」な解決方法しか知らない。

そもそも救出のような依頼は、彼がそういった外見そとみ「かつこいい」依頼を熱望していたとしても、ほとんど受けた事がない。仮にあるとしても、それは他のハンターが依頼を受けた時、その手伝いとして参加するくらいなものだ。

これはマナージャーであるジッドが、そういった依頼を引き受けてこないからという理由がある。では何故引き受けてこないのかと言えば、アッシュにそういった依頼が向かない事を彼がよく知っているからだ。

救出任務なら、まずどういった手順で救出するのか、また救出する際に救出する対象にとって一番安全な方法は何か、そういった事を考慮しながら実行する必要がある。

「手っ取り早く、こう……ブーマでも斬りつけた方が楽だぜ」

救出する作戦を「ガンガン行け」しか思いつかないアッシュ。「命を大事に」といった作戦を思いつかない彼に救出のような重大依頼を任せる事の危険を、ジッドは知っている。

だからこそ、一流のハンターに育て上げる為にも、今回のようにいっさい戦闘がない依頼を体験させ乗り越えされる必要があった。

「参ったな……交渉ごとってのは一番苦手なんだよ俺は……」

改めて依頼書を見ながら、何度目かの溜息ためいきをつく。

「そもそも、こーいう地味な依頼はハンターの仕事じゃねえよなあ」

彼の目指す「かつこいいハンター」は、交渉ごとなどといった地味な事はしない。だが本当に一流と呼ばれるハンター程、交渉を経て自分を有利な方へと導いていくもののだが、地味故に、彼の目にそんなせこましい「一流ハンター」の姿は映らない。

「だいたい、こんなくだらない事をいちいちギルドに依頼する方も方だし、受けるギルドもギルドだよなあ……あー、それを受け取ってくるジッドもジッドでよお！」

どう解決すべきか？まずその突破口が見つからないアッシュは、そのイライラを愚痴で解消

しながら、手で頭をガシガシと掻きむしる。

が、そうしたところで状況はいっこうに進展しないのだが。

さて、そのアツシュをこれほど悩ませる依頼とは、どういったものなのか？

「なに、そんなに難しい依頼？どれどれ……なによこれ、まるで昼間の電話相談番組みたいなのは」

一人うんうんと呻るアツシュは、近づくアナに気付くことなく、不覚にも手にしていた依頼書をするりと抜き取られてしまっていた。

「あつ、アナ！勝手に人の依頼書を見るなよ！」

それをすかさず、アツシュが取り返す。

「これだってな、ギルドに依頼されギルドが受理した、立派な仕事なんだよ。ハンターだな」

先ほどまではあれこれと文句を言っていたアツシュは、叔父に説得された言葉を用いてアナへの言い訳とした。

「ふーん。そうやって、ジッドさんに言いくるめられたって訳か」

しかしその言い訳も、馴染みのアナには通用しない。

「で、どうするつもり？」

そして悩みは振り出しに戻る。

アツシュが受けた依頼。それは「浪費家の夫が趣味で武器を買い集め困っている。どうにかやめさせて欲しい」というもの。

ジッドやアツシュが言うように、これはギルドが正式に受理した依頼である以上、ハンターズの仕事だ。が、それにしてもあまりにも非道い。普段ならからかうばかりのアナですら、同情せずにはいられなかった。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

そもそも、ごく一般の者がハンターズを活用

する機会は極めて少ないはずだった。今でこそラグオルでの予期せぬ事故……つまりはセントラルドームの爆破により、皮肉な事だがハンターズへの依頼は急増しているが、こんなにも依頼が殺到するとは予期せぬ事だった。事故そのものが予期せぬ事であつたのだから当然と言えは当然だが。

パイオニア2航行中の時期のハンターズは、今程忙しい状況では無かつた。また仮に、パイオニア2が無事ラグオルに降下していた場合も同様だつたと想像出来る。となれば、ハンターズは仕事が無く……つまり収入が無く途方に暮れる事になつただろう。むしろ事前にパイオニア1から得た情報によつて、新天地には腕をふるう機会があるだろうとは皆期待していたが、どれほどの依頼があるのかなどの推測は出来なかつた。つまり、安定した依頼数を確保出来る保証はどこにもなかつたのだ。

それらを回避する為に、ギルドでは小さな仕事……住民間のトラブル解決といった些細な仕事も請け負う必要があつたのだ。そうやって一般乗船員からの依頼を増やしギルドメンバーであるハンターズに潤いを与え、どうにか安定した依頼数を確保しようと努力する必要がある。

つまり、今回アッシュが受けたような依頼をギルドが受理するのも至極当たり前であり、今でもこうして依頼する一般乗船員もいるのだ。

「ウチの唐変木、ムダつてもんが解かつてないのよ」

そういったギルドのふところ懐事情は把握しているつもりだが、しかし他人の依頼人懐事情を語られるとは思つてもみなかつた。

「ちよつとイイ武器を見つけたら、コロコロ買い替えちゃうの。少し我慢してお金を貯めれば、もつとイイ武器が早く買えるようになるじゃない？」

どう解決すべきか、その糸口を見つける事も含め、アッシュはまず依頼人に依頼内容の確認をすべく話を聞いていた。

依頼人である彼女の悩みは、夫の浪費癖についてであった。その夫はギルドに登録したハンターズ……つまりアッシュの同業者。

ハンターズギルドが抱える懷事情。それを解消する為に始めた事業幅拡大。そこに依頼してきたのが、ハンターを夫に持つ妻。依頼内容は懷事情についての悩み。皮肉めいたメビウスの帯がそこに見えるのは気のせいだろうか？
「同じハンターズ仲間のあんたから説得しても
られないかしらね？ よろしく頼むわよ」

依頼そのものは難しい事ではない。要するに、依頼人の夫を説得し、無駄遣いをやめさせられれば良いのだから。

だがそれがうまくいくようならば、依頼という仕事として成り立たないのだ。

「身につまされるっていうのは、こういう事を言うんじゃないの？」

アナが笑顔で……もちろんニヤニヤとからかった笑顔なのだが……依頼人から事情を聞き終えたばかりのアッシュに話しかけた。仕事を手伝う気はないが、面白そうだからとアッシュの後を付いてきていたのだ。

「うるさいなあ……」

人の仕事を余興感覚で見学されては、アッシュにとって面白いはずもない。だがアナをうざったく感じたのは、その事だけではない。彼女の言葉がアッシュの胸を深くえぐったからに他ならない。

「アッシュもコロコロ武器を持ち替えてたわよねえ。今は両ダブルセイバー刃に落ち着いたけど」

依頼人自身、おそらく夫に何度も説得を試みているのだろう。しかし今一つ効果が現れない事に業を煮やして依頼していると思われる。同

業者ならば気持ちを理解出来る分説得しやすい
と考えて。

だが気持ちが判るといふのは、必ずしも良い
方向ばかりには傾かない。

特にアツシュはアナが言うように、今使つて
いる両^{ダブルセイバー}刃に落ち着くまで、何度か所有武器

を持ち替えている。自分が求める「格好良さ」
を追い求めるが故のこだわりであり、依頼人の
夫とは事情が異なるが、気持ちは理解出来てし
まう。

アツシュがこの依頼に頭を悩ませたのは、こ
こに原因がある。

気持ちが判る分、この説得は自分の趣向^{ブライド}に対
して否定する事になる。そんな状況下で、果た
してうまく説得出来るのか？自信がない。

仮に、この説得に自信があつたとしたら、そ
れは自分の趣向^{ブライド}が初めからその程度だったと認
める事でもあり、それは説得に成功した場合も

同様である。

そんなもやもやした気持ちを引きづりながら
も、足は説得対象となるハンターへ会いに動き
出した。もちろん、その足は鉛のように重く鈍
かつたが。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

「アホかおまえは」

浪費家ハンターから浴びせられた第一声が、
これであつた。

「ハンターなら強い武器を求めるのは当然だろ
う。ウチの力カアはそれが判らねえからウダウ
ダ言つてるようだが、同じハンターのお前なら
判るだろ？」

まったくもつてその通りだ。そう考えるアツ
シュに、やはり説得は無理だったようだ。

「しかし、高い武器を買いすぎだって奥さんが

……」

しかし仕事は仕事。懸命に努力してみる。

「高い武器であればあるほど強いのが自明の理。そうすれば報酬の高いモンスターもやつつけられるし、お金はますます貯まってゆくではないか。だから、少しでも高い武器を買っておくのがカシコイのだよ。わかるか？ ああん？」

が、その努力も空回って終わる。

こうして、まずアツシュの惨敗で1ラウンド目が終了した。

「あのねえ。あんなんに言いくるめられてどーすんのよ」

惨敗を見守っていたアナが、あきれながら助言する。

「言ってることは間違いじゃないけど、その頻度が激しいから効率が悪いでしよってーの。あんたももうちょっとシャキツとしなさいよ、シ

ヤキツと！」

これはあくまでアツシュが受けた依頼。アナが口出すわけにはいかないが、しかしアツシュのまどろっこしい説得を見ていてイライラするのもまた事実。思わずアツシュにきつく当たってしまったっていた。

「いや、判ってるけどさ……」

どうにも格好悪いままではシャクなのか、アツシュはなにかしら言い訳をしようとして試みたが、言葉が続かない。それはそうだろう。実際に言いくるめられ相手の言う事に納得してしまっていたのだから。

「判ってるならもう一度説得に行く！」

ドンと背中を押され、アツシュはコーナーからリング中央へと2ラウンド目を戦う為に送り出された。

アナに言われた事を思い返ししながら、アツシ

ユは賢明に説得を再開していた。

だが、アナに言われた事をそのまま口にするのは、なんとなくためらわれた。単純に、言いなりに動く自分が嫌だったという、ひねた子供っぽい感情がアツシュを素直にさせないだけなのだが。

「ほら、高いからって必ずしも良い武器とは限らないし……」

そんな事もあり、アツシュは別のアプローチからの説得を試みた。

そして、結局は繰り返される。

「だが、攻撃力は低いが値段が高いという武器には、特殊な効果があるとか命中率が高いとか……それなりにオイシイ特典がついているのだよ」

しまったと気付いた時には、もう遅かった。

「要は使い方によって、値段なりの効果を発揮するということさ」

まったくその通りである。そうアツシュが認めてしまった時点で、この勝負も決着が付いていた。

「そんな物言いじゃ、オレの心は動かないぜ」
そして第2ラウンドが終了した。

「あーもーっ！高いからといって決して強いワケじゃないとか、そんな細かいことはどーでもいいのよ！」

どうして素直にアドバイス通りやらないのか。アツシュのひねた性格に腹を立て怒鳴るアナ。

「もーいいわ。ギャラいらなから私が直接行ってくる」

「や、ちよつと待て、待てつて！」

立腹したまま、まるで足音を響かせるよう歩き出したアナを、アツシュは必死に止めた。

口より先に手が出るだろう。激怒したアナの

取る行動など、火を見るより明らかだ。そんな
つては依頼どころの騒ぎではなくなる。

「なによ、じゃあ君がちゃんと説得出来るって
言うの！」

それもまた、即答に困る。

「……あつ、そうだ。ここは……」

アナを見て、一人適材した女性に思い当たっ
たアツシュ。このどうしようもない状況の打開
を、その女性に託そうと提案した。

「高い武器が基本的に優れているというのは判
りますが……」

説得は、アツシュが助っ人として呼んだ女性
……クロエに託された。

本来なら、クロエに助言をもらいアツシュが
説得すべきなのだろうが、それはもう不可能だ
ろうとクロエが言い出した。

アツシュはすでに、二度も説得に失敗してい

る。これでは仮に、三度目の説得をアツシュが
素直にクロエの助言通り行ったとしても、相手
がアツシュを見下している為にそうそう納得は
しないだろう。というのが、クロエの見解だ。

それともう一つ、アツシュにはこういった説
得交渉という高等戦術に向かないからという理
由もあったのだが、いたずらにアツシュの面子
を傷つけてもしかたないと、こちらの理由につ
いてクロエは口にしなかった。

「その値段に対する相対的な効率向上度……つ
まり、費用対効果が重要であり、あなたの武器
買い替え頻度はそれを無視していますよね？」

さすがと言うべきか、クロエは見事相手の理
論を打ち崩し、如何に無駄な消費をしているか
を示した。

「うおっ！そ、それを言われるとイタイ……」
見事な論理に、浪費家ハンターも負けを認め
ざるを得なかった。

「イタイけど……やめられないんだってば。許してくれよう」

負けを認める以前に、おそらくこの浪費家も自分でその事には気付いていたのだろう。気付いていたからこそ、理論武装という言い訳で自分の浪費を正当化し、消費を続ける事に文句を言わせなかったのだ。これまででは。

「所詮、新しいものがりの武器フェチなのよね」
ざつくりと、アナが追い打ちをかける。

「ぶ、武器フェチ……！そ、その通りだよ。見るこの光沢！重量感！タマらないだろ？新しい武器ってどんなに美しくて素晴らしいか、興味があるじゃないかあ」

いとおしく真新しい武器を見つめ語り出す男を、アナとクロエは一步後ずさりながら聞き、アツシュは苦笑いを浮かべた。

結局の所は、アナの一言が全てを物語っているのだが……フェチ、マニア、オタク……言い

方は様々だが、何かしらにこだわりを持つ者は、是非はともかく、こだわりを貫き通す事に執念執着がある。特に男性は何かを集める事に悦楽を覚える事が多く、彼の浪費もその典型といえるだろう。

「……なによ、アツシュ。その顔は」
「いや……ちよつとな……」

そして男なら、その収集欲を本能で理解してしまうから、人の事を強く言えない。しかもアツシュにしてみれば、こだわる方向性がこの浪費家とほぼ同じなのだから余計に。

自分ではない、別の男に向けられたはずの言葉というナイフが、ざつくりとアツシュの胸をも切り裂いていた。

「男の浪漫こたわりを、女つてのは判っちゃくれねえんだよなあ……」

仕事を無事終えたはずなのだが、アツシュは晴れやかな気持ちにどうしてもなる事は出来な

かった。

§ § § § § § § § § § § § § § § §

「まあかわいそうな気もするけど、やはり無駄な出費は悩みの種になるのよね。家計を預かる身としては」

無事依頼を終えたところで、クロエがぼつりと今回の総評を漏らした。

「使うのは良いけど、使うだけ無くなる物だという事は理解して欲しいわ。本当に」

ちらりと、クロエはアナを見つめ言い出した。

「ホントホント。無駄な出費はそれこそ無駄よねえ」

ケラケラと笑うアナに、クロエは溜息をついた。

「……自覚しているだけ、あの人の方がましだったかもね……」

自分もギルドに依頼しようか？それもまた無駄な出費か。などと一人頭を悩ませるクロエの苦労は、終わりそうにない。

そしてもう一人、悩める者がいた。

「結局……俺は何をしたんだろう……」

今回の依頼を取ってきたジッドとしては、アツシュに何か得る物があるのではと期待していた。その何かとは、交渉という駆け引きの難しさや大切さなどであり、それを体験し学んで欲しいと思っていたのだが……。

「やつぱり、こういう地味な事は俺の仕事じゃねえよなあ……」

ジッドが期待する程、アツシュは大人ではない。それをジッドが学んだというのが、唯一の収穫だったのかもしれない。